



TITLE:

唐宋變革期における四川成都府路 地域社會の變貌について

AUTHOR(S):

佐竹, 靖彦

CITATION:

佐竹, 靖彦. 唐宋變革期における四川成都府路地域社會の變貌について.
東洋史研究 1976, 35(2): 275-308

ISSUE DATE:

1976-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153618>

RIGHT:

唐宋變革期における四川成都府路地域社會の變貌について

佐 竹 靖 彦

はじめに

- 一 地域と生産力發展の劃期
- 二 農業における協業的側面の變化
- 三 土豪支配の變質
- 四 大家族的同族體制の崩壞
- 五 土地所有における新しい法理の成長
おわりに

はじめに

筆者は、これまで唐代的な社會が宋代的な社會に變貌してゆく過程で、一定の地域が、一定の地域的に特有な性格を共有すること、いいかえれば一定の矛盾を共有することに注目し、各地域におけるその地域にティピカルな社會變化のパターンを見出し、その特徴を分析することを通じて唐宋變革のあり方を追求してきた。^①

今この過程を一應中國における中世から近世へかけての變革過程と名づけておきたいが、この變革の過程は、各地域における近世的狀況の最終的確立の時点までを射程に入れて考えた場合には、極めて長期にわたるものとして把えられねばならないであろう。

問題を單純化して言えば次のようになる。すなわち全體としては中世的な社會關係の中で、一定の地域において近世的な社會關係が芽ばえ育ち、そしてその周邊部にひろがってゆく。従つてこの點にのみ注目すれば、各地域は各時點において、先進から後進までの一系列の坐標軸の上に、互に系譜的關係をもつ連續した點として位置づけることが可能である。いいかえれば、それは基本的に共通の事態の時間差をもつた地域的展開として理解される。

そしてこうした過程は、それ自體極めて長期にわたる過程であるとともに、現實の歴史過程においては、このような特性をもつた地域相互の、各地域にみられる諸關係相互の、立體的な結びつきの中でとらえられなければならない。最も基本的な問題だけをとりあげても、中世的權力の嚴存する時期と、その崩壊變質期、近世的權力の確立期のそれぞれの中で、それぞれの地域はそれぞれの權力とのかかわりあいの中で獨特の問題をうけとらなければならない。各地域が、その地域的變貌の過程で、それぞれに特殊な様相を呈するのは少くとも、ここに根據がある。

このような大雑把な見通しの中で、成都府路地域の變貌^⑧をみる場合、その起點は唐初に、そしてその新舊の矛盾の最終的爆發は宋初の王小波・李順の叛亂にもとめられるであらう。

ここでの分析の重點は、このような動きをもたらした新しい生産力が地域的にどのように擴大傳播していったか。又この新しい生産力にともなう新しい社會的關係、鄉村レベルでの新しい人間關係が、どのようなものとして形成されていったか、總じて言えば、問題の最も普遍的な側面におかれている。

この過渡期に成立した兩蜀王朝の權力機構の分析については稿をあらためたいし、この地域の主客戶制度、戸等制度のもつ特殊な性格もとりあげることはできなかった。ただ筆者のかつての後者の問題についての言及に對する周藤吉之氏の批判には全く承伏しがたいので、それぞれの論文の問題個所を注記しておくことにする。^⑨

王小波・李順の叛亂は、こうした新しい動きの成長と古い體制の矛盾として一應は理解されるが、全體としては新しい近世的體制の上に立つ宋朝が、四川においては、古い體制を溫存しながら、新しい近世的手段によって、一種の植民地的

收奪を行っており、このことが叛亂の性格を複雑なものにしている。

ここでは、この王小波・李順の叛亂よりは、その叛亂後に展開した近世的事態の分析に重點をおきたい。

一 地域と生産力發展の劃期

宋代の四川は、成都府路、梓州路、利州路、夔州路の四路に分れていた。この四路が宋代においてそれぞれ特有の地域性をしめしていたことについては、簡單ながら以前に考察したことがある。^⑥それによると極めて單純化して言えば、これらの四路は、成都府路を最先進とし、ここに列べた順に従う一つの發展系列の地域的表現として考えられる。さらにこうした状況にある各々の地域における自然的歴史的諸條件、および各地域間の關係、あるいは四川をふくむこむ全中國的な諸關係の中でこれらの四路はそれぞれに固有の複雑な性格を呈していた。

このような、各路にそれぞれ形成されてきた地域的個性をふまえて、宋王朝がこの四路の區分けにふみきつたのは咸平四年三月（一〇〇二）、王朝の成立後約四十年のち、王小波・李順の叛亂のほぼ十年のちのことであった。

これに先立つ唐末五代の間にあつては、成都府を中心とする西川と、梓州を中心とする東川のあいだに、地域的對立抗爭がしばしばみられ、四川盆地は巨視的には東川西川という二つの地域に分けて考えることが可能であった。さらにさかのぼって唐代には四川一圓が劍南道として出發し、隋代には四川一圓の後進的状況の中でただ一つの先進的な島として成都縣が浮んでいるという光景を呈した。^⑦

ところで一方元代に入ると、四川の中心部分 は四川行省に一括され、明清時代の四川はさらに擴がつて宋代の四路全體の領域に近づきながら、いずれの場合にも、その内部をさらに區分する省分はたてられなかった。

こうして極めて巨視的にみると、隋唐から明清にかけて、四川地域は出發點における等質の地域性の共有から中間での四つの地域への分裂と、高次の段階での今一度の共通な地域性の獲得という道すじをたどっているように見える。

筆者はこうした現象の背後に、成都を起點とする新しい社會的關係の擴大普遍化を想定するものであるが、本章では、このような現象の起點となった成都府路内部における地域的個性の形成と解消の問題、ことに地域的個性の形成の問題に接近してみたいと考える。

本章でとらうとする方法は、一定の生産力の水準にある社會の中で、より高度な新しい生産力が芽ばえ、地域的に展開してゆく場合、この新しい生産力の展開は地域的な人口比重の變化として表現されるであろうという假説に依據している。この點成都府路の周邊部分においては山林の焼畑化、焼畑の定畑化等の水田稻作とは異った要因による新しい生産力の展開がみられるが、これらの地域のもつ量的比重の低さは、ほぼこの要因を捨象して人口比重の變化を考えることを可能にすると思われる。

さて實際に戸口統計の數字によって分析をおこなう前提として、同様の事態の別の表現としてこの地域内における行政區劃の變動の問題に眼をむけてみたい。

この點で第一に氣づくのは、隋、唐初における成都府（蜀郡）の領域と、それ以降の成都府の領域との大幅な不一致である。すなわち隋書卷二九地理志においては、蜀郡は成都以下十三縣で構成されていたが、舊唐書卷四一地理志によると、唐代開元年間のこの地域には、成都府・簡州・漢州・彭州・蜀州の五府州、凡そ二十八縣がおかれていた。すなわち武德三年（六二〇）、本來の蜀郡・成都府の領域から陽安以下三縣をさき簡州が新置され、同時に玄武縣が梓州に分屬した。ついで垂拱二年（六八六）には雒縣以下の五縣をさき漢州を分置し、九隴以下の四縣で彭州が、晉源以下の四縣で蜀州がおかれた。

このような多數の州の分置は成都府周邊地域における唐初以來の飛躍的な戸口増を推測させる。縣の數からいっても、二十八—（十三—）—十六の計算で、十六の新設縣がこの區域に生れたことになる。舊唐書卷四一地理志では、この十六縣中九縣について新置年度が明らかにされているが、これはこの地域をのぞく全成都府路地域の、設置年度の明らか

表Ⅰ 三地域の戸口比重の變動

地域 \ 時間		開 皇	貞 觀	天 寶	太平興國	元 豐
I	戸 數 %			160590 26.7	91878 18.4	135278 ⑩15.2
II	戸 數 %			205065 34.1	193365 38.7	297423 33.4
I + II	戸 數 %	97464 ④45.0	131739 45.9	365655 60.8	285243 57.1	432701 48.5
III	戸 數 %	119311 55.0	155142 54.1	236094 39.2	214423 42.9	459027 51.5
計	戸 數 %	216775 100	286881 100	601749 100	499666 100	891728 100

新設縣の總數に等しい。しかも後者の全九縣のうち六縣は明確に邊境の少數民族居住地におかれており、直接に地域的な經濟的發展に對應したものではない。^⑩

以上の點をふまれば全體としての成都府路はさらに次のような小地域に細かく分けて考えることができよう。

(Ⅰ) 新成都府の領域、すなわち隋・唐初の舊成都府の領域からのちに分離獨立した簡・漢・彭・蜀四州をとりさつて残った領域。(Ⅱ) 舊成都府から戸口増に應じて獨立した簡・漢・彭・蜀の領域。(Ⅲ) 成都府路全體から、以上の(Ⅰ)(Ⅱ)をあわせた區域すなわち舊成都府の領域、をひきさつて残った部分、綿・茂・威・邛・雅・黎・嘉・眉の雅州の領域。の三つの區域がそれである。

次にこれらの各地域の戸口の比重の變動を示す基礎的な數字を提示しよう。「表Ⅰ」。

この表にあらわれた數字をもとにして、又天寶元年(七四二)以降、元豐三年(一〇八〇)まではば直線的におちこんでいく(Ⅰ)區域の比重の落下の趨勢が隋代までさかのぼると假定して、グラフを作成すれば次のようになる。「グラフⅠ」。

一方、新縣設置の傾向からみて、(Ⅰ)の線は直線というよりは、破線部に山をもっているように思われるし、山があるとすれば唐初前後と

表Ⅱ 新しい生産力の地域的展開

地 域	時 期	唐初期	唐中期	北宋中期
I		b	b	b
II		a	b	b
III		a	a	b

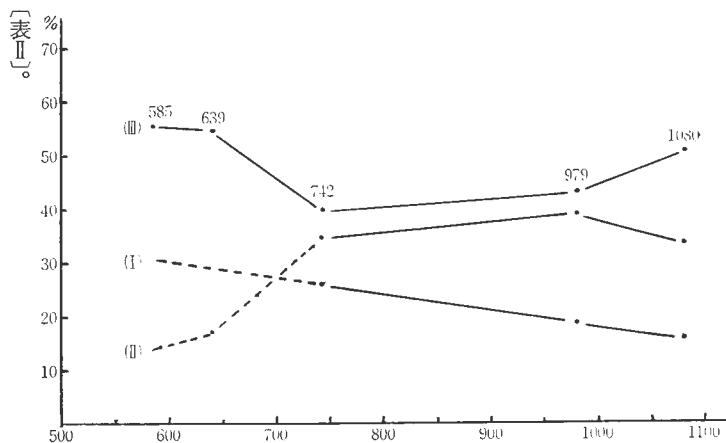
推定される。このような推定が成立すれば、これに
應じて、(Ⅱ) 地域の隋代～唐初の比率増加がゆる
やかになり、唐初～唐中期の比率増大のカーブの傾
斜が著しくなる。

そして、もしこれらの要素を考慮にいて、グラ
フを曲線化すれば、それは最初に昂まりをむかえる
(Ⅰ)の波、これにつづく(Ⅱ)の波(Ⅲ)の波と
いう、互に始期のズレた三つの波の合成として表現
されよう。

以上の材料によって、(Ⅰ)の地域においては、
隋から唐中期までの間に、(Ⅱ)の地域では、唐中

期から宋初の間に、(Ⅲ)の地域では宋初以降に、それぞれ地域の人口比重
の相対的昂まりをみたと推定できよう。そしてこのような人口比重のたかま
りの同心圓的波及は、基本的には、水田稲作における新しい高度の生産力の
傳播受容、展開によるものと推測できるであろう。今このような新しい生産
力の展開以前を(a)、展開以降を(b)として、地域別に状況を整理してみよう。
〔表Ⅱ〕。

こうしてわれわれは、aとbとの間に、生産力のあり方の段階的な差をみとめることができよう。



グラフ(Ⅰ) 三地域の戸口比重の變動

ここでは各時期の農業における協業が、どのように組織されていたのかを中心に問題を考える。

まず問題の最も始發の段階を示すものとして、常に用いられる資料ではあるが、蘇軾の父蘇洵の嘉祐集卷五、衡論下、田制にみられる議論をひいておこう。^⑧

富民之家、地大業廣、阡陌連接、募召浮客、分耕其中。鞭笞驅役、視以奴僕、安坐四顧、指麾於其間。而役屬之民、夏以爲耨、秋爲之穫、無有一人違其節度以嬉。而田之所入、已得其半、耕者得其半。

ここであがられているのは、廣大な一圓的田地をもつ大地主の直接の監督下に、夏の除草、秋の收穫における協業労働が組織されているという姿である。このような状況が、この時期の四川のありさまを下じきにしており、ことに眉山眉山縣の人としての彼の體驗・見聞をふまえての發言であることは事實であらう。

しかしこの議論が、同文集の卷四衡論上にのせられた遠慮・御將・任相・重遠・廣土、卷五衡論下の養才・申法・議法・兵制・田制とつづく抽象的な議論の一部として展開されている點を考慮にいれ、この田制の議論自體が、「周公の制たる井田の精神」を形をかえていかすことを主張しているというトーンをふまえていうと、この議論の背景にあった現實は、必ずしも、この言葉どうりのものではなかった可能性がある。

ある社會にすむ人間が、その社會の状況を理論的に概括しようとする際、もっともおちいりやすいあやまりは、理論的に概括しやすい状況を一般化して、それをその社會全體のあり方であるとするところであらう。そして概括しやすい状況は、これまた一般的にいえば、新しいものよりは古いもの、すでにそうした状況の性質について、公許の認識ができあがっているものであることが多いものも容易に肯定できよう。

このように考えると、蘇洵の議論は、四川のそここに實在してはいたが、すでに生命力を失いつつあった古い形を、この地域に支配的であった事態であるものとして展開されていたと推測することが可能である。^⑨

眉山においては、前章の議論を参照すれば、ようやく宋初以來はじめて近世的な生産力のあり方が展開しつつあったの

であり、北宋中期においても、かれの眼をくらませる程度に古い關係は殘存していたのである。實際にはかれの描くイメージは、次に問題にするかれの子、蘇軾の思い出の中でえがかれた事態よりは、隋・唐初の土豪經營のあり方にびっぴりしている。¹⁰⁾

ここではかれの議論をこういうものとして、すなわち前節でみた(a)の段階における協業の組織のしかたを示すものとしてうけとっておきたい。そして數多くの農民を直接に指揮監督して除草・秋收等の大規模な單純協業を行なうこの形態は本來一圓的な大土地所有に對應するものであったと考えることができる。

さて、この地域における協業のより新しいあり方は、蘇洵の子蘇軾の經進蘇東坡文集事略卷五一の「眉州遠景樓記」の中にみられる。

歲二月、農事始作。四月初吉、穀稚而草壯、耘者畢出、數十百人爲農。立表下漏、鳴鼓以致衆。擇其徒、爲衆所親信者二人、一人掌鼓、一人掌漏、進退作止、惟二人之聽。鼓之而不至、至而不力、皆有罰。量田計功、終事而會之。田多而丁少、則出錢以償衆。七月既望、穀艾而草衰、則仆鼓決漏、取罰金與償衆之錢、買羊豕酒醴、以祀田祖。作樂飲食、醉飽而去、歲以爲常。

ここでのべられているのは、夏の除草における協業のあり方である。ここでは協業労働の指揮監督は、村落共同體的な規制を背景としながら、農民の中からえらばれた「衆の畏信するところの者」によって執行されている。

そして農民の労働力の提供も先にみたような富民の強制下で行なわれるのではなく、農民の「自發的な」共同労働への参加という形をとっている。

このような農民たちの「自發的」「共同體的」な協業労働の組織の原理としては、田の面積に應じた労働力の提供がうたわれているから、そこでは原始的平等ではなく、標準田地を保有する標準的農民家族を規準とする小農民の平等主義が基礎になっているといえる。

さらに、田地の保有額が標準規模より大きなものは、それにみあった労働力を提供できない場合には、代償として「共同體」に對して金銭を據出するという點では、こうした小農民相互の間に觀念的にはフラットな共同體的關係が形成されつつあったことが知られる。

こうした「平等な結合^{ナカ}」という觀念は、この金銭の據出と、「衆の畏信するところの者」の指揮監督下での平等な労働の強制、怠者への罰金という形で保障され、そしてこれらの金銭をあつめて行なわれる秋の田祖のまつりの場において全面的に開花するわけである。

このような協業のあり方を、先にみた事態に接續するものとして考えると、そこでは一圓的な大土地所有の下での農民の經營の確立と新しい農民的共同體的關係の形成、その中での農民の階層的な分化が想定される。こうした事態はこれとあらはらに、大土地所有そのものの變質^{II}その實際の經營からの遊離と私的公的な領域支配の追求への傾向を推定させるものである。こうした事態こそが、(a)の段階にひきつづいて展開し、人口の飛躍的なかまりをもたらした(b)の段階の生産力に對應する社會變化の一側面であつた。

ところでここに規定した(b)の段階をもし近世的な段階とよぶなら、それは實際には極めて萌芽的なものとどまつてゐる。蘇軾もまた自分のえがく眉州の農村狀況を、「古に近きもの」「漢唐の遺風にして他郡の及ぶなきところ」と規定しており、すでに王小波・李順の叛亂をへた成都府路地域では、より新しい狀況(Cの段階)が一般的となりつつあつた。

以下、成都文類卷四六にみえる任淵の「雙流照烈廟碑陰記」によってこの問題を考えてみよう。

雙流縣は、宋代の成都府の中の一縣であり、時期的には南宋の紹興三十一年、水利工事の際の協業のしかたがここで問題となっている。事態を概観すれば次のようである。

成都府の屬縣の田は全て渠堰によって灌漑・水利の調節を行つており、九昇口より下流で現在手を加える必要のあるところが二十ヶ處ほどある。そのうちもつとも配水規模が大きく工事の費用もかかるのが、新開江の張懷・杜源の

二つの堰である。毎年正月になると、雙流・廣都の知縣が、附近の四縣の人夫數千人をあつめて、隊伍をくませ隊長をおいて工事にとりくむ。

ところが被調發者の名簿がきちんとしていても、實際にやってくるのは六割から七割、それも日をおって少くなり、十日ほどにもなればほとんど姿をけしてしまふ。やと残ったのは年寄と病人ばかり。點呼をしようとすると、入れかわりたちかわり、代返するので手がつけられない。……

この工事は毎年おこなうものなので、年々堰の積み石が高くなるはずなのに一向かわらない。何故かという、毎年秋冬、官吏の検査がおわれれば、舊い竹落^{たき}がたきになるというので、折角つくった堰をこわして、竹落をきりうりする。このため毎年積んだ石が江におちこんでもとのもくあみという状況のくりかえしであると。

ここにみられるのは、恐らくは從來は有效であつた一つの協業の原理が、その意味を失い、頽廢しつつある姿である。それではどのような協業のあり方がどのようにくずれつつあつたのか。從來の状況の片鱗は次のような記事の中からうかがうことができる。

凡執役之夫、日費米二升、薪菜之錢二十、皆取給於田主。而奸民豪姓、往々斬斷、憊倖苟免、不肯供役。或曰、汝負吾租、當爲我出力、則徒手役之。其實給者、隊長與黠吏、乾役^{（役）}自潤、而陰免其役。故所調夫、多逃匿不充數。

この記事から推測される水利工事の本來のあり方においては、工事の負擔は各農民のもつ田地の面積に應じた費用の共同支出によってまかなわれていたと思われる（皆取給於田主）。これに費やされる勞働の方も、本來は「奸民豪姓」をふくめて全農民に割りあてられ、一方、夫役參加者は平等に工賃をうけとっている。ここにはたらいっているのは、先の眉州遠景樓記にみられた小農民の平等主義と基本的に共通した原理である。そして問題はまさにこの小農民の共同體的仲間主義が、「奸民豪姓」の勞働參加の拒否[＝]仲間としての義務の拒否、と工事費の侵蝕[＝]仲間組織の破壊とによって崩壊しつつある點に集中的に表現されている。この「奸民豪姓」こそかの「衆の畏信するところの者」の後身であろう。かれらの

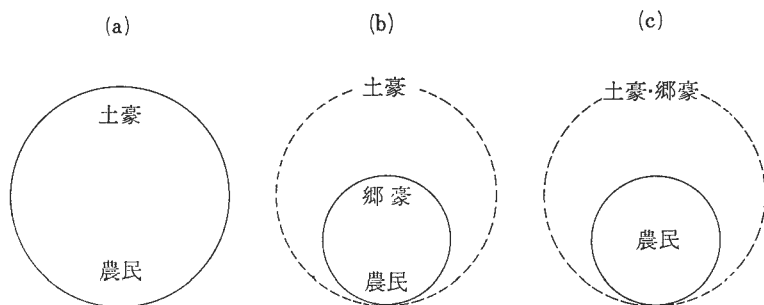


圖 I 協業勞動組織の變化

實線は勞働の組織の範圍を示し
點線はその上に立つ支配の性格を示す

農村共同體的秩序からの浮上・遊離、上からの秩序組織者への變身は、ここにいう萌芽的な近世的農村秩序（あるいは中世末期的農村秩序）を再變質させた。

このような事態をふまえて、任淵は、農村における地主たちと農民たちを共同體的原理でつつみこむという從來の方式を斷念し、工事費は土地所有者から徴收し、官吏がこれを保管し、實際の勞働はこれらの地主を除外した層に依據して行なわせることとした。

予始建議、令田主當出錢者、先期輸之官、官爲擇近便地、置帑廩受之。悉書於籍、無所隱遁。役既興、則擇其伍中謹愿者、發錢米、併日給、使造飯羹、以時餽餉、鳴鼓會食。主者嘗之、罰其腴削不精旨者。人既得飽、用力自倍、衆又畢集、可就數其存亡。歲之初春、民方艱食、未有所營、何憚而不就役。籍令逃去、吾帑廩固在、可召募閑民而役之也。

以上のような狀況と平行して竹落の撤去の禁（かつては不足した工賃の一種のみかえりとしての意味をもっていたであろう）が行なわれたのは當然である。「錢米權之官、則役夫可不令而至。故基不輒毀、則石可無求而足。堰之利害、決於兩言爾。」と。

以上のような各段階にみられる協業勞働の組織の原理の變化をまとめて圖示すれば、上のようなになるであろう。^⑩〔圖一〕。

三 土豪支配の變質

ここでは前章でみた協業労働における變化をその一側面とするような、全體としての社會關係の變化をもう少し廣い視野から検討してみたい。

まず土豪支配のあり方を前章での分析と相對應する形で豫想しながら整理すると次のようになるであらう。

- (a) …前章(a)に對應…土豪の農民に對する一圓的支配。 (b) …前章(b)に對應…土豪の農民に對する初步的な領域的支配。
(c) …前章(c)に對應…土豪(郷豪)の農民に對する發展した領域的支配。

ここでいう(a)の段階から(b)の段階にうつる變化のポイントは、在地有力農民(郷豪の前身)を中心とする在地秩序、すなわち初步的な農民の共同體の出現が、土豪の領域的支配者としての途をひらき、又領域的支配者への途においやるといふ事情である。

史料にあらわれたものとしては、この(a)から(b)への過渡期にある土豪の姿として、八世紀中ごろ、漢州雒縣(第二地域)における土豪彈壓の事例と、^⑭九世紀末、邛州(第三地域)における土豪の叛亂の事例、^⑮すなわち阡能の叛亂、の二つのケースをみることができる。

又地域的には成都府路には入らないが、この阡能の叛亂等の唐末の動亂を契機に、民兵集團の組織者から合昌二州の刺史にまでのしあがり、州刺史としての公的地位を利用しながら、領域内の比較的規模の大きな義軍鎮を、それぞれ、一族「子弟」によって掌握して一種の小型藩鎮をつくりあげた有名な韋君靖の例は、(a)から(b)への移行に成功した土豪の典型としてとらえることができる。^⑯

まず阡能の叛亂についてであるが、すでに指摘されているように、^⑰叛亂の前史としては、邛州を中心とする定邊軍の設置(八六八~八七〇)と、そこでの民兵政策、南詔の侵入等の事態をみておく必要がある。

民兵問題については、資治通鑑考異卷二三、咸通十四年五月條（八七三）に錦里耆舊傳をひいて「米點壇丁子弟、教之斫（刺）刀、補義軍將、主管教練兵士」といい、新唐書卷一八四路巖傳をひいて「取壇丁子弟、教擊刺、使補屯籍」という。

ここで問題は「子弟」である。今一つの漢州雒縣の方の事例でも、子弟の存在がみえるが、そこでは「崔立爲雒縣、有豪族陳氏爲縣錄事、家業殷富、子弟復多」（封氏聞見記卷九除蠶）といい、子弟の多さが勢力のバロメーターとしてあつかわれている。またこの記事のつづきには崔立がこの土豪陳氏を撲殺せしめたことが記されているが、このあと陳氏の子弟親屬數十人が縣衙に來り哭して一種の示威を行ったが、崔立は「取其子弟盡杖殺之。其疏者、皆決驅出」せしめたとあって、その親屬は親なるものゝ子弟と、疏なるものゝ子弟以外の二つのグループに分けて考えることができた。この點からいうと、當時の土豪は、その中心に、多くの子弟すなわち若者グループをかかえる大家族體制をとり、その周圍に同姓の諸家族をひきつける二重の體制をとっていたのではないかと思われる。

この同族的結合の中心にいたところの大家族の規模については、ここで問題とした阡能の叔父の阡行全の家族が三十五人とつたえられており（資治通鑑卷二五五、中和二年十二月條）、恐らく「祖父母父母有らば別籍異財せざる」大家族の型態をとっていたと推測してよからう。ここでは一應この體制を家族的同族體制と呼んでおきたいが、こうした體制は、本來はかれらの開發地主的側面に由來するとともに、次第にかれらの農民への領域的支配を支える中心的な力として働くようになった。

以上のような體制を前提として考えれば、定邊軍でとられた處置は次のような意味をもっていたと想定できよう。すなわち、在地の土豪を中心として組織された義軍・郷軍の組織の中核を形づくる大家族の若者グループを義軍將としてその地位を公認し公權力の在地支配の支柱とし、一方かれらを屯田兵の籍に入れて、この面から統制をきかせ、土豪勢力の自立的發展を制約しようとしたものであると。

こうした政策は一方で土豪の領域的支配者への途をひらき、他方ではかれらが直接に唐朝の権力と衝突せざるをえない状況をくりだしてゆくであろう。しかも南詔侵入への抵抗の中で強まった農民の力——蜀民數千人、爭操芟刀白梃、以助官軍……資治通鑑卷二五二咸通十一年二月條（八七〇）——と地域の窮乏・收奪の強化は土豪の支配體制に複雑なモメントを與える。

かくて中和二年三月（八八二）、邛州の「土豪」で「牙官」、邛州蠻とも邛州首望ともいわれる阡能が叛亂にたちあがった。^⑤叛亂の直接の契機は「公事違期」するによりと稱せられるが、このような前史をふまえてみると、ここに在地での一圓的大土地所有者であった阡能（おそらくは少數民族の有力者が、その地位を利用しながら農奴主的土豪へ轉化したもの）^④の領域的支配者への發展（義軍の支配者から鎮將・刺史へ）への成長というコースと唐朝の領域支配の強化という二つの力の間の矛盾の激突をみる事が可能であろう。

今一つの例、漢州雒縣での事例でも、土豪を「誅殺」した崔立は、采訪判官にあてられ、監察御史に出世しているのであって、この場合でも雒縣の土豪・縣の錄事陳氏と、縣令崔立の間の對立は偶然という以上に必然的な二つの力の衝突であらわしているように思える。封氏聞見記には前引部分にすぐひきつづいて「蜀漢風俗、縣官初臨、豪家必先饋餉、令丞以下、皆與之平交」とあって、蜀州漢州の地域（第二地域）ではこのころ土豪と縣官とが平交^{なまじりまじり}していたと傳えている。^⑤

「豪盛を待みて」「禮數甚だ倨って」おり、「其の資産を計れば、當縣の一年の租税に充てるに足る。」といわれたこの陳氏と先にみた韋君靖の場合とを比較しても、問題の出発としての在地の勢力においてはほぼ同様の存在ではなかったかと考える。

九世紀末、唐王朝の支配體制の崩壊とともに、四川においては、この(a)から(b)、あるいは(b)の段階、の土豪支配は、韋君靖の場合に典型的にみられるように、地域的な藩鎮體制——それと表裏する土團兵・鄉軍・義軍の結集——として表現されようとした。そしてこうした状況は史料的には東川を中心にある程度の材料を残している。

唐末の東川で「八州の壇丁共に十五萬人」（資治通鑑卷二五五、中和四年三月）、「遂州の兵二萬」（資治通鑑卷二六一、乾寧四年九月）「資州の義軍二萬」（蜀鑑卷八）というように、その規模の大きさは恐るべきものがある。たとえば天寶元年に遂州の戸数が三五、六三一、資州のそれが二九、六三五と舊唐書地理志に伝えられ、又ここである八州の壇丁十五萬に對して、同じ天寶元年にのちの梓州路に屬する十一州（梓遂果資普昌戎瀘合榮集）の總戸数が約二九萬五千と伝えられている。

この點からみると、この地域の壇丁・義軍は實質的には、凡そ各州の領域下にある全ての農民を對象とした徵發兵の制度であつたと思われる。

これらの民兵組織の中味としては、宋初になつての梓州についての記事であるが、續資治通鑑長編卷七、乾德四年夏正月庚戌條（九六〇）に、「僞蜀時、……有郷將都將等、互擾郷里」といわれており、ここという都將は他の地域でのそれと同様に、それぞれの自衛團の長としての土豪であり、郷將はその下で各農村の組織を把握していた郷豪層であつたと考えられる。

一方、成都府を中心としては、こうした史料はあまり多くないが、王建の西川への侵入に際して「所在に兵を擁して自保し、衆あるいは萬人、少き者も千人、……皆衆をひきいて建に附す」（資治通鑑卷二五七、文德元年六月條）（八八八）といわれた漢州の土豪何義陽らの存在は同様の事態がこの地域にもみられたことを示している。^⑧

そして宋初になると、西川の土豪支配の姿は数多くの史料にあらわれてくる。今くりかえして原史料にたちもどつて事態の展開をたどることはひかえたいが、とりあえず二つの問題點を指摘しておきたい。

第一は、宋王朝側の事態の認識と、それにもとづく四川政策についてである。宋王朝とその官吏の四川地域全般に對する認識の基調は、この地域の秩序が「數千戸」にわたる「小民」を「數世役屬せしめる」土豪を中心としてくみたてられているとみる點にあつた。

宋王朝はその四川征服のほとんど直後に、續資治通鑑長編卷九、開寶元年六月癸亥條（九六八）に

西川及山南諸州百姓、祖父母父母在者、子孫多別籍異財。詔長吏申戒之。違者論如律。
 といひ、翌年八月丁亥條に

令川陝諸州、察民有父母在而別籍異財者、其罪死。

というように、この地域の別籍異財を嚴禁した。このような禁令は、單に一般的な「風紀上」の問題であるとか、この時期、この地域に他の地域に比して特に「別籍異財」が多發したとかいうようなことを意味するのではない。これまでみてきたような土豪の大家族的同族體制を、この地域の秩序維持の主要な柱として措定し、かれらの在地での勢力を溫存し、これを宋朝の四川支配の重要な手段・支柱とすることが、この政策の眞の狙いであつた。

實際には宋王朝の植民地的收奪・近世的收奪が、これらの土豪の基盤をもゆるがす程の苛酷さで進行したためこのねらいは十分な効果を發揮しなかつたが、ここに勃發した王小波・李順の均產一揆についてすら、「蜀川兆亂、職豪民嘯聚旁戶之由也」（太宗實錄卷七八、至道二年八月丙寅）とか「李順之亂、皆旁戶鳩集」（宋史卷三〇四劉師道傳）とかいうのが宋王朝の公式の見解であつた。ここにみられるのは平時においても叛亂時においても、この地域の動向を決定するのは、これらの巨大な土豪の歸趨であるという見方である。そして叛亂後においてもなお、地域支配は相變らず土豪的地域秩序にもとずいて行なうという決定がなされたことがこれらの史料のあとに記されている。

第二の問題點は、こうした宋朝の地域認識にもかかわらず、宋初から王小波・李順の叛亂期にかけて、土豪の下における郷豪層の成長を示す史料が少なくないことである。

島居一康氏は、續資治通鑑長編卷四六、王小波・李順の叛亂にややおくれる咸平三年春正月乙未條（一〇〇〇）にのせる王均の叛亂の記事に注意をむけている。^⑧

初、知蜀州供奉官閣門祗候楊懷忠、聞成都亂、卽調鄉丁、會諸州巡檢兵、刻期進計。蜀民不從賊者、相率抗禦、自謂清壇衆。懷忠又擇清壇衆之魁七十餘、悉補巡檢。

ここでは、知蜀州楊懷忠が郷丁を調して諸州の巡檢兵と會して云々というので、この民兵指導者「清壇衆之魁」たる七十餘人もおそらく蜀州の領域内からえらばれていたと思われる。蜀州内で、どの程度のひろがりをもって、王均の叛亂に對する自衛團が結成されていたかは不明であるが、いずれにしろ、蜀州の一部で七十餘人という魁首の數は、かれらが本稿でいう土豪でなく、その下で成長してきた郷豪層であることを推測させる。しかもかれらは、楊懷忠によって「巡檢に補せられる」ほどの成長をしめしていたのである。

さらに先にもひいた太宗實錄や宋史劉師道傳にみえる有名な「郷豪」も史料においては、耆長から官吏（州縣の職）への途を歩みうるものとして把えられており、周藤氏の度々の批判にもかかわらず、やはり丹喬二氏や鳥居一康氏の主張される如き存在、すなわち土豪の下で成長しつつある郷村の有力農民、であったと考えるべきであろう。ここでの問題は、土豪秩序下でのこれらの郷豪層の成長そのものが、土豪支配のせまさをうちやぶり、かれらの領域支配を支えているのではないかという想定と、宋朝の近世的領域支配の中で、郷豪層が、逆に宋朝の領域支配のスタッフとしてさえ想定されるという事實である。こういう状況はまさにここでの(c)の段階、郷豪土豪の發展した領域支配の擔い手への轉化の段階にあるものといえよう。勿論四川においては、すでに近世的な領域支配の體制は宋王朝によって上からおしつけられており、地域の郷豪土豪層はこれに對する受身の對應をしいられたというのが、問題の主導的側面であるが。

ところでこれまでは、この地域における社會的關係の變化の問題を土豪支配の變質にしばって考えてきた。しかし土豪の領域的支配者への發展は、當然その周邊の農民をその支配につみこむことなしには行なわれえないし、逆にこの地點からそれ以前の段階をふりかえれば、土豪支配の(a)の段階、一圓的所有支配の段階においてさえ、かれら土豪が、州縣の官あるいは吏として執務し、實際の縣政がかれらの共同執政の下にきりまわされている事態を想定すれば、その支配地域外の農民も、土豪支配と無關係な政治的秩序の中にあつたと考えることは不可能である。

以上の點を考慮して、最後にこれら土豪支配の變質に對應する一般的政治秩序の段階的な變化を、假説として提示する

と次のようになるう。

(a)、土豪の一圓的農民支配が、そのまま一般農民に對する王朝の政治的支配の手段となる段階…團保の秩序の段階、
(b)、郷豪の成長が土豪の領域的支配を支える段階…土團の秩序の段階、(c)農民的共同體的關係の確立によって、土豪郷豪をふくむ公的領域支配が確立する時期…戸等制的秩序の段階。

さて最近大澤正昭氏は、藩鎮權力の軍事構造の地域的差異を問題としてとりあげ、江南江淮における土團兵の活躍についてふれ、この地域の開發における「一圓的な地主佃戸の〔相互〕依存の經營の存在が、『土團』的權力の伸長に有利な條件であつた」とされている。^⑧ 筆者は大凡その傾向として、この見解に同意するが、これまで論じてきた議論とのかかわりでいえば、さらに、この相互依存の經營といわれるものの中味、特にその普遍的側面が問題となると思う。すなわち大規模な土團兵の領域的形成は、一圓的開發地主の農民への規制を出發點としながら、その下での郷豪を中心とする農民たちの一般的な小經營の自立によってひきおこされる農業生産力の高まりと、新しい在地秩序の形成を基礎としてはじめて考えられるのではないかという點である。

唐宋變革期にあって、土團兵の出現が、巨視的にみて、宋初の戸口統計の中で、客戶率の高い地域…揚子江流域を中心とする中國中部Ⅱにみられたことは、開發地主的土豪の存在が、土團形成の前提となっていることをうかがわせるが、一方、こまかくみると、これらの地域内での相對的に客戶率が低い部分で土團兵が活躍するようにみえるのは、土豪支配の領域化にとって、郷豪層を中心とする農民層の成長と郷豪の在地秩序の形成が、本質的な要素であつたことを推測させる。^⑨

これらの點からいうと、唐初華北において施行された府兵制の前提として、その前代の郷兵集團のメカニズムを分析し、「府兵制の史的意義も郷兵のそれから類推しうる」とした谷川道雄氏の先驅的業績は、唐宋變革を全面的にとらえるために、今一度たちかえて検討されるべき重要な論點をふくんでいる。

ここで詳論するゆとりはないが、筆者は巨視的にみたこの時期の黃河流域の先進性と揚子江流域の後進的發展を前提とすれば、基本的には、かなりな程度に共通のメカニズムに立った事態が、北魏隋唐期の華北と唐中期以後の華中に共通してみられたのではないかと推測している。

四 大家族の同族體制の崩壊

王小波・李順の叛亂における事柄の特殊近世的側面、宋朝の貨幣經濟や專賣體制を利用した收奪、及びこれと對應するこの地域の農業における地域的分業の展開、專業的茶園戸の叛亂に果した役割等々については、すでに最近の研究によって十分に、ある意味では過度の比重をもって解明されている。^⑩

筆者は、こうした研究成果を基本的には肯定しながらも、この叛亂の廣がり^⑪と徹底性^⑫を一つの根據として、この叛亂がこの地域において、より大きな歴史的意味をもっていたこと、すなわちそれが、これまでみてきたこの地域の社會的關係の(b)から(c)への發展を基礎としながら、宋朝の近世的地域政策とからんで激發した民衆叛亂であり、従ってこの叛亂ののちに、はじめて全面的な近世的社會關係がこの地域に成立するであろうことを推測しておきたい。

さてこの叛亂を通じて進行したこの地域の土團の秩序の崩壊ののちにこの地域の社會で典型的に進行した事態は、史料的にみる限り、以下の二點にしばってとらえることができる。

その第一點は、これまでの土豪が、その土地所有と社會的支配のために、重要な手段としていた大家族的同族體制の變質崩壊であり、このことは史料面では、當時の土豪層における遺産繼承の問題として集中的に表現される。その第二點は、これまでの土豪的土地所有の原理とは異った新しい土地所有の原理の成長と法的公認であり、それは有名な正法院の「所領」をめぐる争いに典型的にあらわれている。

この章では、第一點の問題をあつかうことになるが、この點については眉州眉山縣の孫氏の遺産争いの例をあげること

ができる。

續資治通鑑長編卷二八の大中祥符七年六月丙辰條（一〇一四）には、この件について

初孫延世、僞作祖父疏、奪孫朴田、計直三百萬。提點刑獄司、命〔眉州通判黃〕瑩辨之。眉山縣尉高用、納延世錢七萬、易其丁簿、以爲證佐。瑩又取黃金三十兩。獄成。夾江縣令李幹審覆之。又取黃金四兩、因逐朴、悉以付延世。朴詣闕訟冤。詔劾得實、瑩等當死。用五年十月戊午赦、特除名、配本城軍。瑩隸白州、幹漳州。

とある。そしてこの直前、同書同卷同年五月戊子條には、「三十年を積み、六たび制劾を経たるも、官吏賂をうけて法を枉げたり」とあり、これが極めて大がかりな裁判事件であつて、單なる農民の遺産争ひでなかつたことをうかがわせる。

ここで孫延世によつて奪われた孫朴の田が三百萬錢に達したこともこの推定をうらがきする。當時のこの地方の田價がどの程度であつたかは不明であるが、一應畝あたり二貫乃至三貫であつたとすると、この事件は十頃から十五頃の廣さの田地の歸屬をめぐる争われたことになる。遺産相續の一部がこれほどのものであれば、全體としての孫家はこれまでみてきた土豪の範疇に入るべき存在であつたとしてよい。しかも、この眉山の民孫朴は、さまざまな狀況證據により、實は蘇頌の蘇魏文公集卷六三の「朝請大夫太子少傅致仕贈太子太保孫公行狀」にみえる眉州眉山の人孫朴と同一人物であつたと思われるが、この孫朴と孫朴の行狀によると、眉山縣の孫氏は、唐末、その六世の祖長孺が、彭山縣令を攝し、そのまま眉山にいついたことに始る。かれは「既に秩滿ちて罷め、因りて眉山に家し、大いに居處を治め、又重樓を構えて以つて書を貯え、日に四方の豪彦を延きて、其の間に講學せしむ。時に蜀人號して書樓孫家となす。」とある。ここにも唐末以來の土豪としての孫家の姿がうかがはつてくる。

ところで長編に記された日付けが正しければ、この遺産争ひのそもその發端は、大中祥符七年（一〇一四）の三十年前雍熙元年（九八四）にさかのぼる。これはちょうど宋王朝が、その四川支配の初期に、四川の土豪勢力を溫存凍結して、その支配の支柱とするために出した禁令——「祖父母父母ありて子孫の別籍異財するもの」を死罪をもつて禁じた法令

——を維持しきれず、律による處罰に後退した太平興國八年十一月（九八三）の翌年に事件が始まったことになる。してみると、この禁令の事實上の解禁によつて、土豪孫家が、「祖父母父母あるも」別籍異財にふみきつたことが、今回の事件のはじまりであつたと推測することも、そう突飛な空想ではなからう。

ここにみられるような、土豪の大家族の崩壊は、第一にかれらの農業生産における開發地主的機能、一圓的經營機能の解消に、第二に宋朝の四川征服による、地域土豪の藩鎮權力機構の中での地位上昇の展望の喪失に起因していると思われる。それは宋朝の四川征服以後一般的な現象となり、王小波・李順の叛亂によつて一層徹底的に進行しはじめた。

このような大家族體制の解體は、當然それに對應する財産相續の方式の變動をとまなう。そして、大家族體制から小家族體制への移行にあつて、從來の相續慣行と新しい現實との衝突・摩擦の焦點におかれたのが、男系子孫なき小家族の遺産を相續法の中でいかに位置づけるのかという問題であつた。

大家族的な相續形態においては、その財産は大家族全體のもの、とりわけ祖父母あるいは父母のものと考えられるから、男系子孫なき夫婦の持分は當然その兄弟の子、すなわち猶子たちに流れこんだであらう。

ところが、祖父母父母在世中の別籍異財が進行すれば、別籍異財して現實の家産の所有者となつた各小家族に、男系子孫ができないということになれば、それはかれらにとつて極めて重大な問題となつて實感されてくる。一方宋朝の側からは、こうしたケースに對して戸絶法を適用してくるので、何らかの形で、男子相續者をつくりだすことが必要となつてくる。ここに出現するのが、男系子孫を有する家族、あるいは家族的慣行を重んずる側からの同姓養子採用の要求と、男系子孫なき家族の相續權の防衛すなわち贅婿の採用、との衝突である。

四川地域の土豪層における宋初の贅婿の盛行については、有名な續資治通鑑長編卷三一・淳化元年九月戊寅條（九九〇）が傳える。

川峡富人、多招贅婿、與所生子齒、富人死、即分其財。故貧民多捨親出贅、甚傷風化、而益爭訟、望禁之。詔從其議。

そして、この記事の意味するものは、のち南宋初めに、夔州路涪州の知州となった趙不倚の説明によって明らかになるであろう。宋會要食貨六一民產雜錄、紹興三十一年四月十九日條（二二六）に次のようにいう。

知涪州趙不倚言。契勘、人戶陳訴戶絕繼養遺囑所得財產、雖名有定制、而所在理斷、或偏於一端、是致詞訟繁劇。且如甲之妻、有所出女、別無男兒。甲妻既亡、甲再娶後妻、撫養甲之女長成、招進舍贅壻。後來甲患危、爲無子、遂將應有財產、遺囑與贅壻。甲既亡、甲妻却取甲之侄爲養子、致甲之贅壻、執甲遺囑與手疏、與所養子爭論甲之財產。其理斷官司、或有斷令所養子、承全財產者、或有斷令贅壻、依遺囑管係財產者。……詔〔給事中黃〕祖舜看詳、法所不載、均令（令均？）給施行。

われわれはここに、富人に特徴的であつたとされる贅壻の盛行の意味をよみとることができる。それはまさに、大家族體制解體後の同族的相續の原理（同姓養子）に對抗する個別家族的相續の原理（贅壻）として出現したのである。

ところで、以上に問題としたのは、土豪の大家族的同族的結合の中心にいたところの、大家族における變化であつた。このような傾向は、當然これらの大家族を核として、同族的體制をつくつていたところの各家族間の紐帶の變質をもたらずであらう。

この點を史料的にさぐる手がかりとして、この地域の典賣慣行の特質をとりあげてみよう。よくひかれる史料であるが、宋會要食貨卷六一民產雜錄の天聖五年二月條（二〇二七）には、

果州同判李錫言。本州典賣田宅、多不問親鄰、不曾書契、或即收拾抽〔稅〕、貫錢未足、因循違限、避免陪稅。是致不將契書詣官、致有爭訟。

同書卷六三農田雜錄の天禧二年二月條（二〇一八）には、

梓州黃昭益、遂州滕世寧言、川界多爭論追贖遠年典賣莊土。及至勘詰、皆于業主生前、以錢典市、及業主戶絕、本人不經官自陳、便爲己業。直至鄰里爭訟、方始承伏。出錢估買。

とある。ここにみられるのは、田地の賣買における親鄰の先買權の確立、契約文書の作成とその公的とどけ出、取引税の徵收、という、宋朝の強制する近世的な土地典賣手づきとは、全く異質の慣行である。しかも後者においては、戸絶を豫想される田地の賣買が問題となり、その摘發が、「鄰里」(親鄰というきまり文句でなく)によって行なわれたことを明記している點が注目される。ここでは、近世的慣行ならざる慣行が、田地賣買の際に働いているのであって、「戸絶田」という、血屬にかかわる問題の近世的ならざる扱いが、新しい法制にのっとった「鄰里」の摘發をうけているのである。してみると、これらの典賣はいずれも同族の人々の間で行なわれていたものであって、一種の同族的規制と慣行が、とりひきのささえとなっていたと推測することができよう。それは、「業主戸絶」ののちは、田産が典買者の手に入ることを豫想した取引きであつた。

時期的には大分くだるが、夷堅志乙志の「張九罔人田」の記事がこれとは別の角度から、この地域の土地典賣における、同族規制の存在とその無力化の一面を示していることも、このような推定の一つの助けとならう。

廣都人張九、典同姓人田宅。未幾、其人欲加質、囑官僮作斷骨契、以罔之。明年來就賣、乃出先契示之。其人抑塞不得語。徐謂之曰。願爾子孫、似我欲言而不得、瀝淚而去。

五 土地所有における新しい法理の成長

丹喬二氏が紹介せられて以來有名となった「正法院常住田記」に伝えられるのは、大土地所有者正法院と農民たちとの、土地所有權をめぐる百数十年の抗争と、正法院の全面勝利という結末とである。ここではこの抗争の経過と意味をたずねることを通じて、土地所有における新舊の法理の衝突の状況を追求したいと考える。

そこでまず當事者の一方である正法院のよつてたつ所有權の論理と論據について概観してみたい。

論據として第一にあげられるのは、この田地が後蜀の節度使田欽全によつて宋初に正法院に寄進せられたという事實で

ある。

第二には、この捨田狀をうけた當時の州縣が「聞見を竄據して」つくりあげ、寺院にあたえた圖券の存在——それは當時の社會の動亂ののちをうけて「僅かに能く南東衡從の位を記し、畦町の交互、經界の錯出の若きは實如たり」といわれる不十分なものではあったが——である。

この二つの論點は正法院の田地所有の根據としては、互の間に微妙なくいちがいをもっている。第一點による所有權の主張は、正法院の一圓的土地所有——道路、溝渠（それに未開墾地）をふくむ——を正當化するものであり、第二點は、具體的な田地を、個々の地片の調査、あるいは申告によって、それぞれに所有權を確定するものである。正法院は、第一の一圓的大土地所有の論理を核としながら、この二重の論理を巧みにつかいわけ、農民の攻撃に對處したのである。

このことは、正法院による田欽全の寄進地の説明によくあらわれている。かれらによって主張される「所領」は、全體としてほぼ一圓的にひろがっており、その面積は約百頃、そのうちの既墾地は寄進時において七〇頃から八〇頃という。

しかしこの説明は、以下に記されたその後の事態の進行からすると事實ではない。事實は田欽全の所領の寄進時の土地開墾狀況は全く不明である、七〇〇八〇頃の開墾地は十世紀末から元豐に至る長期間の農民の努力によって徐々に實現されたものである。正法院がかれらの主張の前提として主張する事態は、實はこれらの田地が蔡京の指示により、最終的に正法院のものとなった時點、すなわち正法院がこの事件に勝利をしめた時點において實現した狀況（三七七三頃+四七七三頃）を、事件の出發點における事態に二重うつしにして主張しているにすぎない。

かくてかれらのいう二つの論點は互に助けあって王黨派の勝利をかなでる。すなわち、この百頃の土地は、一圓的に正法院のものである。しかも問題を一圓的所有の論理によって説明しないでも、正法院の所有權は依然として有効である。何故ならこの所領においては、田欽全の寄進時において、すでに七〇頃から八〇頃の田地が開墾されており、その熟田の所有權は、不十分なながらも、その時點での捨田狀にもとずいた府縣の調査によって、基本的には、正法院のものとして確

定されていたのであって、これらの田地は、その後の農民の怠慢によって荒廢し、あるいは農民の虚偽によって所有權をごまかされていたにすぎない（地の未だ入らざるは參半もたならず）と。

次に問題となるのは、この正法院と對立した主體の内容とそのよって立つ論理である。

まず「初めて新田三千七百七十三畝を得たり」という最初の田地開墾の主體と、「又、美田四千七百七十三畝を得たり」とされる二度目の田地開發の主體との關係が問題となる。

從來の研究では、この點について、最初の田地開發は、所領内の農民を主として、第二回目のそれは、「時に聞うるに他田を以てす」といわれる所領周邊の農民たちを主としていたと考えられている。^{⑤⑥}

しかしながら、この部分の本文は、次のようである。

(a) 升平寢久、(b) 生齒漸繁、人弃刀劍市錢鏹、相與墾田修穡事。以故曩時飢饉之區、萑在草者、類澤々就開墾、(c) 初得新田三千七百七十三畝。(d) 而佃忙之老身長子者、(e) 妄主名、竊有之。(f) ……。(a') 自慶曆距元豐、(b') 執耜日以衆、闢壤日以廣、(c') 蓋又得美田四千七百七十三畝。(d') 而旁近計伍、(e') 侵蝕如故、調如巧焉。(f') ……。

この(e)(e')のあとに(f)(f')ではそれぞれこうした事態に對する處置（第一回目の檢田と第二回目の檢田）が記されており、文章表現として、(a)と(f)と(a')と(f')とが完全に對應していることは明らかである。

そして(c)の「初」に對して、(c')に「又」といい、(e)の「妄主名竊有之」に(e')の「侵蝕如故、調加巧焉」が對應していることからすれば、二度の田地の開墾の主體、從つて百年有餘にわたる正法院との抗爭の主體は、いずれも、「所領」内にすむ佃民たちであつたことは明らかである。

このように解する時に問題となるのは、「旁近計伍」の語句であるが、これは「旁近什伍」のあやまりであらう。一般的にいわゆる「旁戸」という表現も、本來は「旁近の戸」の意味であらうし、當時の士大夫の文章表現からすると、夔州路等に見られる粗野で強烈な身分的支配においても、^⑦成都府における近世的大土地所有においても、その「所領」内の戸

が、ともに「旁戸」「旁近」とよばれていたとしても不思議はない。これら正法院の佃民たちも「數世役屬せる佃戸」であつたわけである。

ところで、宋代蜀文輯存の卷二六には、この「正法院常住田記」の作者である楊天惠の「附子記」がのっている。

綿州故廣漢地。領縣八、惟彰明出附子。彰明領鄉二十、惟赤水廉水會昌昌明宜附子。總四鄉之地、爲田五百二十頃有奇。然稅稻之田五、菽粟之田二、而附子之田、止居其二焉。

これで見ると、彰明縣で一郷あたり、百三十頃の田地が登録されていたことになる。綿州は元豐九域志によると九四郷、主戸一〇、六六四戸、客戸一七、〇八五戸、計一二三〇四九戸で一郷あたり一三一戸となつて、計算上は一戸あたりの田地はほぼ十畝となる。これにかの有名な續資治通鑑長編卷一六八、皇祐二年六月條（一〇五〇）の

蜀民歲增、曠土盡闢、下戸才有三五十^十（七？）畝、或五七（十？）畝、而贍一家十數口。一不熟、卽轉死溝壑。

という記事を重ねあわせれば、この數字もある程度信憑性をもつてうけとることができよう。このような状況は成都ではより甚しかったと思われるが、一應この一戸あたり十畝というこの數字を援用すれば、元豐のころ正法院に八五頃の田地があつたとして、この「所領」に生活する農民は八五〇戸に達することになる。正法院もまた數百數千の小民を役屬させる典型的な土豪的大土地所有者として士大夫に把えられても不思議はない。

以上のように問題の田地をめぐる所有權の争いが、一貫して正法院とその「所領」にすむ數千人の農民たちとの間にあつたとなると、かれら農民が、どのような論理に立つて、この長い闘いをたたかったのかを検討する必要がある。

さて、問題の「所領」においては、二度にわたる検田があつた。ところで、この二度の検田の結果は、前後で全くことなつていた。

第一回の検田においては、「佃忙の老身長子せる者、主名を妄にして竊かにこれをもつ。府縣實を覈して、迺ち寺に隸するを獲たり。」とあるのに對して、第二回の検田においては、旁近の反抗に手をやいた府縣が「上下謀を合わせ、おも

えらく、此の弊の滋きは歳久しくして亟ちに正すべからず。姑く縣官に歸すれば、謹訟を弭む可しと。因つて兩つながら枉と直とを置きて竟えず、第にこれを籍入す。」と常住田記はのべている。

この處置に對して、寺院側では「衆遂に噤塞して捨去し」たのであつて、寺院側の主張の實現はほとんど不可能であつた。

ここにはいくつかの問題がある。その第一は、第一回目の檢田においては、農民の不當な土地所有↓調査↓田地の本來の所有者たる寺院への歸屬という論理が明確であるのに、第二段階では、この論理が消えさつて、ただ農民の實力と、事の由來の久しさの前に、如何ともしがたいといつてゐることである。それも本法院の側に立つ楊天惠がこう表現してゐるのであつて、實際にはより正法院にとって不利な事柄がのべられた可能性が高い。しかも、一方では、この處置によつて「謹訟をやむべし」といつてゐることからすると、農民側ではこれまで、法的にもその立場を堂々と主張してゐたことがうかがわれる。

このような事態は、この段階において、一般的な法理論上、正法院の主張は充分な説得力をもちえず、農民の主張の方がむしろ妥當であつたことを思はせるし、第一の段階と第二の段階の間に、正法院の論理が同様に適用できなくなつた事情が生れたことをうかがわせる。

第一段階において「府縣實を覈す」といわれているのは、實際に府縣が佃民たちの耕作してゐる田地を現地にか、帳簿上においてか、調査したことを意味するが、「迺ち寺に隸するを獲たり」というのは、この調査結果と、正法院が宋初にえた圖券とを對比して、不確かな圖券であれ、現地の耕作地を、この圖券のそれに比定する形で、正法院の個々の地片に對する所有權が、それぞれに確定されたことを意味しよう。従つて、この地點であらためて田地の所有權が、縣の五等丁産簿の中で寺田として明確にされ、寺院側も租入關係の帳簿を整備したはずである。

このように見てくれば、第二段階の議論は、本來この時點から出發すべきであつた。にもかかわらず、正法院の長僧德

信は、相變らず、「故圖を挟み、破券を輯めて」都下にうったえ、「是れ我が圖券中の物、我當に死をもつて爭わん」という。ここでは、正法院の主張する第一の論理、すなわち、圖券中の田地は、一圓的に正法院に歸屬すべしという論理と、現實の土地の所有・占有狀況に應じたそれぞれの地片の公的登録という第二の論理——それはまた當時の支配的な論理であつたが——とがぐいちがつているのである。

問題の第二は、第二の段階でとられた府縣の處置の内容と、その基づくところの法理である。

從來これについては、縣がこれらの田地を旁近のものとして、縣の民田の籍に入れたものだとしている。^⑧しかしそうであれば、これは「枉直を兩置して竟さず」ということにはならず、一方的に旁近のいい分が通つたことになる。そうではなくて、これらの田地は、「姑らく縣官に歸す」といわれているのであるから「縣官」のものとなつたのであつて、民田になつたのではない。この場合の「縣官」とは、漢代に天子のことを縣官と稱したことに基づく雅稱であつて、意味するところは、これらの田地を官田としたということであろう。こう解してはじめて徳信の論理が生きてくる。「この世には筋道というものがあり、物事には歸屬するところがある。公のものなら公にさしだすべきであるし、私のものなら私に還すべきである。どうしてこんなに愼々いひひんなのか」と。いうところは、正法院の一圓的所領の半分は私田として寺のもの、半分は官田として公のもの、こんなでたらめがあるかと。

以上の二點を總合すれば、この間の事情はほぼ推測できよう。すなわち第一回の檢田により、正法院の「所領」の中で、すでに熟田となり、寺田として確定された部分と、未開墾地とがわけられた。この未開墾地は、成都府路においても、このところ確立しつゝあつた近世的田制においては、荒田として把握されるべきものであつて、寺院側では、これらの荒田に對して主名の占定と開荒の手續きをとることが必要であつた。しかしながら、寺院側では、前代の遺制的な形態である一圓的所有の原理も、それなりに生きつづけている過渡的な狀況の中で、安易な途について、これらの手續きをしなかつた。

これに反して農民たちは、荒田占定の手續きをとっており、寺院の壓力に對して實力行使を行つて訴訟にもちこむといふ、これらの強い態度は、ここに起因している。

このような状況の中で、正法院が勝利したのは、所有者が、寺院であつて私人でなかつた點によるところが大きく、それも凡そ絶望的な苦闘のうちに、蔡京の一言で決したのである。蔡京のいうところも、田欽全とその妻郭氏の遺志にそむくことはできないし、徳信の一徹さにまけたというにとどまり、正法院の法理が認められたわけではない。

以上のように、正法院が、新しい事態の展開に對應できなかった原因は、基本的には、その所有の實際の經營からの分離にもとめられよう。そして、このように經營から實際上分離した土地所有をも保障するような宋王朝の近世的田制に背をむけていたのがその致命的な弱點となつていた。

第一に、正法院は、その所有權の面では、一圓性に固執しながら、實際の經營においては、一圓的經營への何の關心も示さず、それどころか、何らかの經營の存在にもとずく農民たちへの恩きせがましい發言さえみられない。

第二に、これと對應して、租入は全く寺の「家計」のためにつかわれており——「租之經入、當辨賦役、嚴佛供、節道場、安僧徒、亡可増損者」——家産經營のための何の意識も發言もない。

第三に、二度に亘る檢田において、當面の係争地＝荒田＝をめぐつて、寺院側と農民側との間にかわされた契約、地券の類いは全く存在せず、寺院側は、農民の開荒については完全に默認していた。

全體としてみれば、ここにみられるものは、荒田開發をめぐる二つの法理の衝突、すなわち、大規模な開發地主の實力と身分とに對應した「大四至」の占定という、中世的荒田把握の原理と、荒田の存在そのものが、典型的には職役の體系を通じて把握され、個々の地片の公的開發申請とその認可とによって、始めて荒田の占有が實現するという近世的な荒田把握の原理との衝突である。

そして最後の結末が、たまたま正法院の勝利に終つたとしても、一般的には、すでに後者の論理がこの地域においても

表Ⅲ 社會變質の地域的展開

地 域	時 期	唐 初 期	唐 中 期	北宋中期	土豪支配の型	政治的秩序
I		b	b	c	發 達 し た 領 域 支 配	戸 等 制 的 秩 序
Ⅱ		a	b	c		
Ⅲ		a	a	b		
土豪支配の型		一 圓 的 支 配			初歩的領域支配	
政治的秩序		團 保 的 秩 序			土 團 的 秩 序	

確立しつつあったのである。

最後にこれまでの全ての議論のまとめとして表Ⅲを提示しよう。(b)を過渡期として、(a)と(c)の間に生産関係の變化をみようとするのが筆者の理解である。

おわりに

本稿においては、中世から近世へかけての歴史の發展の基礎としての、小農經營の全面的な自立^⑥と農民的な共同體的關係の形成、これに對應する中世的な一圓の大土地所有の變質と荒田開發をめぐる新しい法理の成長という論點と、こうした諸關係の地域的展開の想定という論點を相互連關的に追求することによって、唐宋變革期における四川成都府路地域の變貌を考察した。

そこでは、いずれの時期においても王朝の支配と所有の問題は捨象されており、今後の検討に委ねられているが、なお以上の議論を基礎にして、この問題とくに近世王朝のその性格に一定の視角を提供することが可能であろうと考える。

その第一は王朝支配のスタッフの問題である。以上の分析から豫想されるところは、土豪的所有と經營とをほりくずす事態の進行そのものが、かれらを領域的な支配者への途においやり、しかも眞に領域的な支配者になろうとすれば、かれらはもはや土豪という姿をすてさって、王朝の領域支配の一スタッフに變身することが必要となるであろうということである。

こうした事態の進展の中で、大土地所有一般が崩壊したわけではない。むしろそれは、個々の具体的な經營からきりはなされることによって一層發展する契機をえたといえるし、王朝の支配と所有もまたより一層巨大なものとして發展する基盤をえたことになる。

その第二は、王朝支配をささえる在地秩序の問題である。本稿でいう近世的な政治秩序は在地においては戸等制的職役の體制によって支えられている。そして職役を在地の秩序への地主の干與という面から把えた場合、その中心的な擔い手は、基本的に徴税には義務をおわず、在地の治安維持、水利等共同體的再生産の機能を把握していた耆長であったと思われる。「今世三大戸之役、自公卿以下、無得免者」。(蘇轍欒城集卷三五)。ここでの問題についていうなら、荒田(可耕不耕の地)の管理把握もまた、こうした戸等制的職役の機構を通じて、村落規制の網の目の中で、個々に處理されていたわけである。そしてこうした形の地主の在地秩序からの解放は、近世的政治秩序の最終的完成を意味しよう。

この点から以後の歴史を展望するなら、こうした事態の展開こそが、明末清初の徭役の全面的貨幣納の前提となったと思われるし、又このことと、宋代においては客戶として制度上とりあつかわれていた農民たちが、一人前の農民としてとりあつかわれるまでにその小經營を發展させるという事態とは、恐らく無關係ではない。以上の状況は明末清初が、中國における近世社會の成熟完成期であることを意味するものであろう。

註

① (a) 「宋代四川夔州路の民族問題と土地所有問題」(史林五〇の六、五一の一)、(b) 「唐末宋初の敦煌地方における戸籍制度の變質について」(岡山大學法文學部學術紀要第三十號)、(c)

「唐宋變革期における江南東西路の土地所有と土地政策——義門の成長を手がかりとして——」(東洋史研究三一の四)、(d)

「宋代贛州事情素描」(青山博士古稀記念宋代史論叢)。

② 本論文でいう成都府路とは、太平實字記の劍南西道に綿州を加えた地域をいう。

③ 佐竹靖彦「宋代四川夔州路の民族問題と土地所有問題」(史林五〇の六)の四八頁から四九頁と、周藤吉之「青苗法に

おける客戶の貸付規定」(山本博士還暦記念東洋史論叢)の二六五頁及び二六八頁の注七を讀みくらべられたい。周藤氏は筆

者が呂陶の淨德集卷四、元祐元年の「奏使回奏十事」にいう、成都府では、主戸に比して客戸が数倍の多きに達するという記事に氣づかずに議論しているといわれるが、筆者はその當否は別として、少くともこの呂陶の發言そのものを重要な手がかりとして議論をすすめているのである。

④ 佐竹靖彦注①の論文。

⑤ 松井秀一「唐代前半期の四川——律令制と豪族層との關係を中心として——」（史學雜誌七一の九）、「唐代後半期の四川——官僚支配と土豪層の出現を中心として——」（史學雜誌七三の一〇）。

⑥ 蜀郡内のもの、成都府華陽犀浦廣都郫池、漢州德陽金堂、彭州濠陽、茂州石泉。

蜀郡外の少數民族居住地帯のもの、嘉州羅目、雅州百丈榮經、黎州飛躍、維州薛城小封。

その他の地域のもの、綿州鹽泉、邛州安仁、陵州籍縣。

⑦ 元和郡縣圖志は戸口の實勢よりは王朝支配のあり方をより強く反映しているようなのでここではとりあげなかった。舊唐書卷一六、元和十五年十二月條にいう。「是歲戸帳、戸總二百三十七萬五千四百、口總一千五百七十六萬。定鹽夏劍南東西兩川嶺南黔中邕管容管安南、合九十七州、不由戸帳」。唐代の戸口統計については日野開三郎の「天寶以前における唐の戸口統計について」（重松古稀九州大學東洋史論叢）、「天寶元年の戸口統計的地域的考察」（史林四二の四）、「唐貞觀十三年の戸口統計的地域的考察」（東洋史學二四）参照。

表（一）において、各時期の（Ⅱ）（Ⅲ）地域に屬する州名は次のよ

うである。

天寶、（Ⅱ）彭漢蜀簡、（Ⅲ）眉綿嘉邛黎雅茂維陵。

太平興國、（Ⅱ）彭漢蜀簡懷安永康、（Ⅲ）眉綿嘉邛黎雅茂維陵。

元豐、（Ⅱ）彭漢蜀簡懷安、（Ⅲ）眉綿嘉邛黎雅茂威陵井監。

なおこのうち、①玄武縣は唐初以降一貫して東川に屬するもので、これを省き元の數字に十三分の十二をかけて一〇五五八六をえた。②熙寧五年に陵州の貴平籍の二縣を成都府の廣都に入れたというので、元豐時の成都府の八縣の中に潜在的にあと二縣の戸數がふくまれているとして當時の成都府の戸數の十分の二、すなわち三三八二〇戸を（一）からひき、（Ⅲ）に加えた。

⑧ 周藤吉之「宋代四川の佃戸制」（唐宋社會經濟史研究）、「北宋佃戸制再論」（宋代史研究）。

⑨ 蘇洵の議論のすすめ方の特徴については、清水茂「唐宋八家文」（下）（朝日新聞社）が参考になる。

⑩ 松井秀一注⑤論文、ことに第一論文の陳子昂家系、なかんずくその從祖父であつた陳祠の經營についての論及を参照。

⑪ この國は、中世末期以來新しく展開する生産力と社會秩序の段階的な變化を圖式化することが目的であり、こうした動きをつつこみ、規制していた中世的社會秩序の問題は捨象している。

⑫ 封氏聞見記卷九除蠹。愛宕元「唐代後半における社會變質の一考察」（東方學報四二）は、この史料をひき開元二十二年（至德乾元の間のこととする）。

⑬ 松井秀一注⑤第二論文。

⑭ 栗原益男「唐末の土豪的在地勢力について——四川の韋君靖

の場合——」(歴史學研究二四三)、日野開三郎「唐韋君靖碑の應管諸鎮案節級に就いての一考察」(和田古稀記念東洋史論叢)。
 ⑮ こうした胥吏のあり方については、北夢瑣言卷四の蜀州唐興縣の吏の場合、同書卷十一の眉州の吏の場合、それに蘇軾の眉州遠景樓記にみえる吏の描寫等参照。

⑯ 池田誠「均産一揆の歴史的意義——九—一〇世紀における變革の一問題——」(歴史學研究一五二)。

⑰ 島居一康「王小波・李順の亂の性格——宋代四川の地主佃戶制との關連において——」(東洋史研究二九の一)。

⑱ 大澤正昭「康末藩鎮の軍構成に關する一考察——地域差を手がかりとして——」(史林五八の六)。

⑲ 佐竹靖彦注①(c)論文。

⑳ 谷川道雄「北朝末期の郷兵について」(東洋史研究二〇の四)。
 ㉑ この點については、のちにひく楊天惠の附子記參照。又茅亭客話卷九の「景山人」には「住川城北隅、數畝園蔬、家族數口豐儉得中」とある。

㉒ 重松俊章「宋代の均産一揆と其の系統」(史學雜誌四二の八)、侯外廬「唐宋時代の農民戰爭の歴史的特徴」(東洋史研究二三の一)。

㉓ 田價については、宮崎市定「宋代以降の土地所有形態」(東洋史研究十二の二)、柳田節子「宋代の下等戶について」(東洋學報四二の四)等参照。

㉔ 同文集卷五五の「孫公墓誌銘」によると、「幼にして孤」とあり、行狀には「公、儒者なるをもって、獨り好しきを繼ぐを得ず」とあって、孫抃も遺產繼承上の問題をかかえていたこと

をうかがわせる。又行狀には、孫抃が「未だ冠せずして、祥符宮賦五千餘言をつくり」、成都尹凌策がこれを激賞して朝廷にすすめようとしたが果さなかったという。先の孫朴の事件を凌策がとりあげたのも大中祥符七年のことであつたし、宋史の傳によつても凌策が知益州であつたのは大中祥符五—九年のことであつたから、この二つの事件は全く同時期のことであつたと考えられる。このように見れば、蘇頌が孫氏の族祖とする七世の祖が諱を樸といったというのも作爲的である。これは族祖に樸の名をあげれば、同じ眉山の人孫抃は孫抃と同一人でありえないし、族系も孫朴と異つていたと主張できるわけである。行狀には「公初め實と名づけ字は某」というが、字を諱とした例は老學庵筆記卷三の「蜀俗厚」にもみえており、ここは實は「公初め朴と名づけ字は實」というのが本當ではなかつたらうか。「蜀俗の厚き」中で、のちに大官となつた孫抃が、遺產争いの族恥をさけて改名し、族系の記録にも細工を加えたというのが事の真相であらう。

㉕ 丹喬二「宋初の莊園について——成都府・後蜀國節度使田欽全の所領を中心として——」(史潮八七)。

㉖ 丹氏注②論文は、この資料の作者楊天惠を新興地主の立場に立っているという。しかし楊氏の族祖楊炯は初唐詩の四傑の一人であつたうえ、その殘虐淺薄は有名な事實であつた(舊唐書卷一九〇上文苑傳)。宋代に入つてもこのことは有名な話柄であつた(州縣提綱卷二)。一方かれ自身丹氏もいふように崇寧の黨籍に入つており、かれの頭の中での楊炯像、かれの現實の行爲、かれの撰した碑文の内容、の三者を貫きうる論理は、新

與地主というよりは極右的な果敢な王黨派のそれでしかありえないと考える。

- ②⑦ 周藤吉之著「宋代史研究」に對する筆者の書評（東洋學報五三の二）参照。

- ②⑧ 草野靖「宋代民田の佃作形態」（史艸十）。

- ②⑨ 周藤氏はこの「謹訟」の主體を寺院としている。しかし氏のいうように問題の田地を民田としたのでは寺院側が「謹訟」をやめるわけではないので、この處置によって「謹訟」をやめるであらう主體は佃民であることになる。一方筆者のように（後述）問題の田地を官田としたとすると「謹訟」の主體は寺院・佃民の兩者ということになる。

- ③⑩ 佐竹靖彦「宋代鄉村制度之形成過程」（東洋史研究二五の

三）。

- ③⑪ 小山正明「中國における專制權力と『農民組織』（七五年歴史學研究會大會特集）。近世社會の成熟完成期云々は、勿論小山氏がこのようにのべているのではない。筆者が我田引水的に氏の業績からこようよみとるにすぎない。

附記、筆者は本誌三十一の四に發表した論文（注①のc）において、羅香林「客家史料滙編」の「潯潭隱記」をひいている。實はこの文章の原型は、洪适の盤州文集卷三三の「盤州老人小傳」にあつて、當然こちらをひくべきであつた。發表直後に氣付いたが訂正の機會をえなかつた。なお、「小傳」を利用すればやや説明が必要となるが、論旨にはさしつかえないと考えている。

**The Regional Changes of Chen-du-fu-lu 成都府路
in Si-chuan 四川 at the Age of Reform between
Tang 唐 and Sung 宋**

Yasuhiko Satake

In this article, the author investigates the following two points in a transition stage from the medieval society to an early-modern one, in the western district of Si-chuan 四川 (Xi-chuan 西川).

(1) One is the development of the early-modern social relation which started from Chen-du 成都 and expanded to its environments. In detail, the points of his argument are the developing process of small farmers' management establishing itself, and corresponding with it, the making of a new agrarian communal relation, and a change in quality of the medieval great landholding, and a growth of the modern principles of law.

(2) The other is the process of the making and dissolution of the smaller regional peculiarities in the Xi-chuan 西川 districts, caused by the development as stated above (1). In detail, we can see an increase of a new productive power in the central area of Xi-chuan, especially in the early Tang 唐 period, and in its environments, in the middle of Tang era, and in the border district of Xi-chuan, in the beginning of Bei-sung 北宋 period. Corresponding with this phenomenon, in these three parts of Xi-chuan districts in question, at this period there could be seen the process of the making and dissolution of the regional peculiarities.